研究会報告

「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班　2022 年度研究会

「表象としての鳥居―ブラジルを事例に―」

報告者：加藤里織（非文字資料研究センター　研究協力者、神奈川大学日本常民文化研究所　特別研究員）

「『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』から日本近代期のサハリン島を探る」

報告者：松山紘章（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）
日時：2022 年 7 月 23 日（土）13:00～15:00
場所：神奈川大学みなとみらいキャンパス／Zoom 会議

日座　久美子（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　博士後期課程）

「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社班による研究会が、7 月 23 日に対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。今回の研究会は、2 名からの報告となった。加藤里織氏は、ブラジル各地の「鳥居」に注目し、「鳥居」が日本を表すシンボルとなっている近年の事例について報告した。松山紘章氏は、昨年、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターに所蔵された、樺太の絵葉書を蒐集したアルバム帳を取り上げ、南北樺太の統治状況を踏まえ、絵葉書に見られる神社と教会について報告した。

なお、加藤里織氏の報告の詳細については、『非文字資料研究』第 24 号（2022 年）に掲載されている。また、松山紘章氏の報告の一部は『非文字資料研究センター News Letter』No. 48 で紹介されている。ぜひ参照されたい。以下、報告に沿って要旨を記す。

表象としての鳥居―ブラジルを事例に―：加藤里織

2021 年 1 月、ブラジル、サンパウロ人文科学研究所（通称、人文研）が約 4 年にわたる実態調査をまとめた報告書『多文化社会ブラジルにおける日系社会の実態調査―日系団体の活動状況フィールド調査からその意義と役割を探る』を刊行した。調査は、2016 年から 2020 年 12 月まで行われた。この調査結果を報じた現地邦字新聞によると、ブラジルには鳥居が「150 基以上」存在するという（『ニッケイ新聞』2018 年 12 月 4 日付）。誰がいつ、鳥居を建立したのだろうか。

ブラジルの移民史

日本人のブラジルへの集団移民は 1908 年までさかのぼる。初期の移民はほとんどが雇用契約移民であったが、日本政府による渡航費用の支給が行われ、1930 年代前半には年間 2 万人を超えた。アジア・太平洋戦争で中断したが、1952 年に再開した。しかし、戦後の日本経済の発展で年間移住者数は減り、1993 年に日本政府の移住者送り出し事業は事実上終了した。

このような日本移民の歴史を持つブラジルで、鳥居はいつ頃から建立されたのだろうか。

小笠原省三氏によれば、東京植民地神宮には 1915 年頃に鳥居が建てられており、現時点ではブラジルで最古の鳥居と考えられる。『ニッケイ新聞』は、2009 年 6 月 18 日にはブラジル全土に鳥居が 68 基以上存在すると報じている。1950～70 年代に建てられたものは神社に併設され、宗教的意味合いを持ったが、1974 年にリベルダーデ地区に建てられた鳥居は、「社なき鳥居」として「日系のシンボル」というイメージづくりに一役買うものとなった。

「日本移民顕彰」としての鳥居

ブラジルの鳥居の多くが 1950 年代以降に建てられたものであり、そのほとんどは 1978 年の「日本移民 70 周年」と 2008 年の「日本移民 100 周年」を記念して建てられた。特に 2008 年は、「爆発的」な鳥居建設ラッシュで、多くが神社とは関係のない場所に建てられた。

『ニッケイ新聞』の 2008 年の調査によると、サンパウロ州ではスザノ市にある文化協会や日本移民広場の入り口に、アマゾナス州マナウス市では空港にも鳥居が建てられた。イグアッペ植民地やレジストロ植民地など、戦前古くから開拓されてきた移民移住地には、日本移民

を顕彰する鳥居が建てられている。

表象としての鳥居

サンパウロ市リベルダーデは、20年程前までは日本人街として認知されていた地域である。リベルダーデの大阪橋には、大鳥居が設置されている。この大阪橋と鳥居は、リベルダーデの象徴的建造物となっており、ブラジルの人々はこの建造物から日本をイメージする。宗教的な意味合いは全くなく、観光地のシンボルとして建設された。このような鳥居は、リベルダーデのあちこちで見ることができる。

以前の日系社会では、富士山や提灯などを日本の表象として使用していたが、近年では鳥居が日本、日系そのものを表すようになった。鳥居が日本をイメージさせるものとして定着してきている。例えば、ブラジルを代表する文化の一つであるサンバカーニバルで、衣装や山車に鳥居が用いられる事例もある。

鳥居は現在も多く造られており、近年さらに、鳥居ブームが起こっている。ブラジル南東部のエスピリトサント州にある南米初の曹洞宗寺院白雲山禅光寺には、2004年に大鳥居が建てられた。パラナ州アサイ市では、2008年の日本移民100周年にあたり、日本式の城が建設され（2018年完成）、入り口には鳥居が設置された。宗教的意味合いは別として、多くの鳥居が建てられている。

なぜ鳥居がたくさん建てられるのか。一番の理由として、「日本祭り」がブラジル社会に鳥居をイメージづけていることが考えられる。「日本祭り」はブラジル日本都道府県人会連合会が主催し、1998年から毎年7月、サンパウロで開催されている。およそ20万人が参加する一大イベントで、世界最大級の日系人イベントである。会場内には多くの鳥居が見られ、入り口や企業の展示ブースにも鳥居のデザインが使用されている。ブラジル日本都道府県人会連合会は、日本とブラジルをつなぐ組織であり、こうした組織が官民一体となって鳥居を日本のシンボルとしてアピールに使用していることがわかる。

写真1　リベルダーデ（ガルヴォン・ブエノ通り）の大阪橋にかかる鳥居（報告者撮影）

写真2　「日本」をテーマに作成されたサンバカーニバルの衣装（報告者撮影）

おわりに

最大の日系コミュニティを持つブラジルでは、戦後、宗教とは異なるところから、神社の付属施設である鳥居が、日本・日系のシンボルとしてブラジル全土に建設された。

根川幸男「ブラジル近現代史の中の「日本文化」表象」（2009年）によると、1960年代以降、日本文化の表象も多様化し、「日本文化」から「日系文化」として「ブラジル文化」を構成する一要素として捉えられるようになったという。このような「日系文化」に「表象としての鳥居」も含まれるのではないだろうか。

ブラジルは鳥居大国である。そのブラジルにおいて、ブラジル人がどのように鳥居を捉えているのか、それに対し、現地の日本人はどのように受け止めているのかを考えていく必要があるのではないか。戦前の神社と鳥居については、各入植地、記念誌を丁寧に検討し、戦後については、宗教的意味合いだけでなく、日系人のアイデンティティなどに関わる重要なものとして、研究を進めていく必要がある。

以上が報告内容である。報告後、次のような意見が出された。

・移民のエスニックアイデンティティを表象するもの、意識を外部に表象するものとして、鳥居は新しいのか古いのか。

・ある時期にシンボルになったのは、サブカルチャーが流行ったなど、わかりやすいきっかけが身近にあるのではないか。

・日本のシンボルが富士山や提灯から鳥居へとなぜ変わったのか。

・ブラジルと日本の鳥居ではデザインが違う。美意識の多様性がある。

・移民が自分たちのアイデンティティとしての日本文

化の捉え方、現地のブラジル人の日本文化としての捉え方にずれがあるのではないか。重なる部分とずれを調査するのも面白い。

特に日系人のアイデンティティの問題について注目が集まった。加藤氏は、鳥居を日系人のアイデンティティと考えるようになったのは移民 80 周年以降、日系三世の頃からであり新しい。なぜ日本文化の表象が鳥居に変化したのか、日系人のアイデンティティの変化について、現地ブラジルでの調査を進めることで明らかにしていきたいと答えた。今後の進展が期待される。

「『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』から日本近代期のサハリン島を探る」：松山紘章

昨年、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターに『樺太・薩哈嗹〈サガレン〉（北樺太）絵葉書アルバム帳』（以下絵葉書アルバムと略す）が所蔵された。絵葉書アルバムには、日本の保障占領下となった北樺太の絵葉書が 89 枚蒐集されている。

この絵葉書アルバムは文書史料ではわからないサハリン島の歴史を視覚的に知り得る貴重な資料といえる。また、現時点で樺太絵葉書を研究対象とした成果は出されていない。絵葉書の分析を通して、1920 年から 1925 年頃の日本領樺太史と北樺太（史）、これまでの資料ではわからないサハリン島の歴史を明らかにしたい。さらには、海外神社研究の進展を目的とする。

絵葉書アルバム帳について

絵葉書アルバム帳（タテ 22.6 cm、ヨコ 17.4 cm）は全 44 頁で、絵葉書の内訳は、日本領樺太（南樺太）が 65 枚（重複を含む）、北樺太が 23 枚、その他の沿海州尼港が 1 枚である。場所が判明している絵葉書は、日本領樺太の豊原 17 枚、大泊 11 枚、真岡 6 枚、本斗と海豹島 2 枚、野田・泊居・栄浜・熊笹峠・能登呂岬は各 1 枚である。北樺太は亜港 9 枚、日本軍又は薩哈嗹州派遣軍と推定 4 枚、鉄道隊 5 枚、海岸 2 枚、漁業 1 枚、灯台 1 枚、国籍不明の軍艦 1 枚である。尼港の兵舎の絵葉書も 1 枚ある。

絵葉書アルバムには所蔵者や蒐集に関する具体的な情報はない。表面に「饗庭蔵書」と蔵書印が押された絵葉書が 1 枚あり、かつての持ち主の可能性がある。記念スタンプの押印時期や、メモ書き、発行元の印刷などから、日本領樺太の絵葉書は 1910 年代から 1920 年代、北樺太は 1920 年代以後に発行されたと推定される。ただし、蒐集された時期は不明である。

絵葉書の分類と特徴

日本領樺太の絵葉書には、市街、鰊漁、林業、パルプ業、養狐業、神社、残留ロシア人、ロシア正教の教会、自然風景、洪水被害の状況など、様々な題材の絵葉書が含まれている。北樺太の絵葉書は、亜港の街、薩哈嗹州派遣軍、鉄道隊、海岸、漁業、灯台、国籍が判明できない軍艦など、当時の現状を伝えるニュース性がある絵葉書が多い。

絵葉書の発行元として、日本領樺太の絵葉書は、江口商店、近江堂若林書店、大泊鶴岡商店、樺太出品協會、平和記念東京博覧會樺太出品協會、樺太庁、鶴岡商店、野田寒写真館、文樺堂、北進堂、北進堂書店、山形屋、若林書店である。そのうち、神社に関する絵葉書は樺太内の民間業者の発行であった。

北樺太の絵葉書は、現地の軍隊「薩哈嗹州派遣軍司令部」が発行元である。ロシア語のタイトルを記載した絵葉書が見られ、保障占領下の北樺太の統治状況を反映し、現地在住のロシア人の購入を想定している。

日本領樺太の絵葉書からは、市街地の発展状況や産業、漁業、農業が盛んであることが読み取れる。最北の植民地の自然の豊かさがわかる構図で、日本領樺太の発展がわかる。

北樺太の絵葉書のいくつかには軍人の姿があり、日本軍の保障占領下という情報が伝わる。絵葉書の対象は異なり、日本領樺太と北樺太の統治状況の違いでもある。

日本領樺太と北樺太絵葉書の比較

絵葉書アルバムの中に、日本領樺太で神社を写した絵葉書と北樺太でロシア正教の教会を写す絵葉書が、それぞれ 4 枚ある。絵葉書を事例に日本領樺太の神社と北樺太の教会を比べると、日本領樺太は神社の存在感を示している。また、鳥居や大砲を絵葉書にしている。この大砲は、日露戦争の結果を象徴するものとして亜庭神社に奉納されたものであり、大泊の歴史を伝えている。

北樺太の教会を写す絵葉書のうち、3 枚には風景の一部に教会が写されている。残り 1 枚は教会が中心の構図で、他の建物や周辺が写されていない。日本領樺太の絵葉書とは異なり、教会の存在を多くの人々に伝える目的が無かった。北樺太では宗教に関する建物を重要とみ

写真3　54. 樺太豊原市街 NO6 官幣大社樺太神社

写真4　77. Ⅱ. Александровскъ О Сахалинъ（サハリンのアレクサンドロフ）

なしていなかったのかもしれない。

おわりに

絵葉書アルバムから、日本領樺太と北樺太の景観は明らかに異なることがわかる。しかし、北樺太は、日本軍の軍政下で「日本化」する統治が行われていた。絵葉書は当時の状況を全て表してはおらず、蒐集には偏りがある。

絵葉書は、押印の状況から旅行者が記念に蒐集していたとみられる。日本領樺太の絵葉書はほとんどが観光お土産用で、日本領樺太を理解できる情報が詰め込まれている。一方で、北樺太の絵葉書は観光お土産用も含まれるが、鉄道隊や薩哈嗹州派遣軍など現地の様子を伝え、当時の軍政という状況を表わしている。

日本領樺太と日本軍政下にあった北樺太の統治状況の違いが絵葉書にも見られる。日本領樺太は植民地であっても、景観は日本国内と変わらない。絵葉書は植民地意識で作られていないと見ることができる。また、両方にいえることであるが、植民地であることを訴えかけるプロパガンダや国策などの政治性を感じさせる絵葉書は無かった。

以上、絵葉書は場所や状況によって人々への見せ方や伝え方が異なることを示した。絵葉書アルバムは客観的な日本領樺太・北樺太の資料になるといえる。

以上が報告内容である。報告後、次のような意見が出された。

・絵葉書が旅行者に蒐集されたことを考えると、植民地・領土という印象が強く出た方がいいのではないか。
・植民地支配を離れた観光のイメージがあるのか。観光写真といっても純粋に観光とはならず、当時の植民地支配の状況をよく写しているものではないか。
・植民地に注目するのではなく、領土とその延長の占領地という見立てをしたとき、北樺太に相当するような占領地の絵葉書の例があるか、比較した場合にどういう特徴があるか。
・占拠した場所の写真を撮ることで何を伝えようとしているのか。
・樺太神社について４枚だけ蒐集されているが、他にもあるのになぜこの４枚だけが蒐集されたのか。他の絵葉書とも比較検討をすると面白いのではないか。

また、誰がどうやって蒐集したか不明であるという史料の限界についてもコメントが寄せられた。議論を通して課題も明確化し、松山氏は他の占領地の比較対象や、アルバムに蒐集された以外の絵葉書も検討していきたいと回答した。今回、新たな視点が提示されたことで、さらに研究が深められることに期待したい。

写真は加藤氏と非文字資料研究センターの提供となります。感謝申し上げます。